

研究報告

看護学実習に臨む学生のレディネス把握に向けた教授活動 —看護基礎教育課程3年課程の教員に焦点を当てて—

The readiness of students facing nursing clinical practicum and to consider the characteristics of the teaching activity. —Focusing on faculty in the three-year nursing basic education course—

内田佳代¹⁾

Kayo Uchida

キーワード：看護学実習、レディネス、教授活動

Key words : Nursing clinical practicum, readiness, teaching activity

要旨

研究目的は、3年課程の教員による看護学実習に臨む学生のレディネス把握に向けた教授活動を明らかにし、その特徴を考察することである。全国の看護基礎教育課程の教員399名を対象に、学生のレディネス把握に向けた教授活動を問う自由回答式質問を含む質問紙を配布した。無記名個別投函により回収し、Berelson, B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を用いて分析した。140名(回収率35.1%)から回答を得、有効回答134名分を分析した結果、看護学実習に臨む学生のレディネス把握に向けた教授活動を表す36カテゴリ【学生の既習内容を把握するために、これまでの授業内容を記した資料を調べる】【学生に前回の実習中に明らかになった学習課題を尋ねる】などが形成された。Scott, W. A.の式によるカテゴリへの分類の一致率は、70%以上であり、各カテゴリは信頼性を示した。また、考察の結果、学生のレディネス把握に向けた教授活動の特徴9種類の示唆を得た。

I. 緒言

看護学実習において、教員は、自身が展開する教授活動により実習目標の達成を目指す学生の学習活動を支援する(舟島, 2016)。また、学生が学習目標へ到達することを支援するために、学生のレディネスを考慮した教授活動を展開している(舟島, 2013a)。一方で、学生のレディネスを把握することに苦慮し、結果として学生のレディネスを考慮した教授活動を展開できずにいる教員が少なからず存在しており、こうした教員から指導を受けた学生は、その指導内容を理解できずに学習活動が停滞していることが先行研究(徳本・後藤・

新井, 2015)から伺える。このような状況は、学生個々のレディネスを教員が十分に把握するという教授活動を展開できていないことに起因する。

そこで、看護学実習に臨む学生のレディネス把握に向けた教授活動への示唆を得るために文献検討を行った。その結果、次のことが明らかになった。

レディネス自体を明らかにした研究(Areewan, Nongkran, & Acharaporn, 2010; 一條・神成・升田, 2012; 松浦, 2001)は、すでに様々な視点から行われていた。この現状は、すでに多くの教員が看護学を学ぶ学生のレディネスに関心を示し、研究

1) 群馬医療福祉大学看護学部 Faculty of Nursing Gunma University of Health & welfare

的に学生のレディネス把握を試みていることを示す。しかし、学生のレディネス自体ではなく、レディネス把握に向けた教授活動を解明した研究は1件のみであった。この研究(鎌田・松田・山下、2013)は、2年課程看護専門学校の教員による看護学実習に臨む学生のレディネス把握に向けた教授活動を明らかにしていた。

看護基礎教育課程は、2年課程と3年課程に大別され、2年課程の学生は准看護師免許を取得(勝又・門脇・清水、2017)しており、2年課程の教員はこの経験を活用し教授活動を展開している。これは、3年課程の教員が看護学実習に臨む学生のレディネスを把握するために、2年課程の教員とは異なる特徴的な教授活動を展開している可能性を示し、この研究成果を解明した研究は存在しなかった。

以上の背景から3年課程の教員が学生のレディネスを考慮した教授活動を展開するためには、まず始めに看護学実習に臨む学生のレディネス把握に向けた教授活動の全容を解明する必要がある。また、この教授活動を効果的かつ効率的に展開するためには、本研究が解明した教授活動の特徴を教員が自らの教授活動に反映する必要がある。

本研究の成果は、3年課程の多様な看護基礎教育機関に所属する教員が学生のレディネスを考慮した教授活動の質的向上をもたらし、学生の学習目標達成に貢献する。

II. 研究目的

3年課程の教員による看護学実習に臨む学生のレディネス把握に向け実際に行っている教授活動を解明し、その特徴を考察する。

III. 用語の概念規定

1. レディネス

レディネスとは、学習者の学習課題に臨む身体的・精神的・社会的成熟、既習の知識・技術・態度と経験を含む準備状態である。また、学習者のレディネスの成立と学習者のレディネスに応じた教授活動は、効果的・能率的な学習を導く。

2. 教授活動

教授活動とは、教員が教育目標の達成に向けて、知識・技術の習得をめざす学生の学習活動を支援する活動である(細谷・奥田・河野・今野、1990a)。

3. 3年課程

3年課程とは、看護系大学、看護系短期大学(3年課程)、看護専門学校(3年課程)及び看護専門学校(3年課程定時制)である(勝又・門脇・清水、2017)。

IV. 研究方法

1. 研究対象者

全国の3年課程を提供する看護系大学、短期大学、専門学校に所属し看護学実習を担当した教員。

2. 測定用具

次の質問紙2種類を作成し、本研究の測定用具として用いた。①「看護学実習に臨む学生のレディネス把握に向けた教授活動」を問う質問紙と、②「教員の特性」を問う質問紙である。①は、対象が看護学実習に臨む学生のレディネス把握に向けた教授活動について自由に記述する形式であり、②は、本研究の目的達成に向け標本の多様性を確認するために、対象者の特性に関する情報を収集するものである。質問項目は、年齢、教員経験年数、所属する教育機関の所在地、種類、担当した実習領域などである。両質問紙は、専門家会議とパイロットスタディにより内容的妥当性を確保した。

3. データ収集

次の手続きを経て、総数399部の質問紙を配布した。全国の3年課程を提供する教育機関のリストから質問紙を配布する研究対象者が所属する教育機関の標本数を算出した。この際、教育機関の所在地と設置主体による偏りが生じないように比例割り当て法により、都道府県と教育機関の種類、設置主体の標本数を決定し、各地域と教育機関の種類、設置主体を層化変数とする層化無作為抽出

を行った。その結果、全国の3年課程を提供する教育機関95校を抽出し、各教育機関の教育管理責任者に往復はがきを用いて研究協力を依頼した。次に承諾の得られた教育管理責任者宛に質問紙等を郵送した。この際、対象となる教員個々に宛てた質問紙の配布は、教育管理責任者に一任した。回収は、返信用封筒を用い対象者が無記名により個別に投函する方法を用いた。データ収集期間は、2017年5月12日から6月30日であった。

4. データ分析

「看護学実習に臨む学生のレディネス把握に向けた教授活動」を問う自由回答式質問への回答は、研究対象者の生の声を研究成果に反映できる Berelson, B. の方法論を参考にした看護教育学における内容分析(舟島, 2010a)を用いて分析した。この方法論の最大の特徴は、「研究のための問い」と「問いに関する回答文」の存在にある。これは、研究者が、データの多様性に惑わされず研究目的を達成するために重要である。本研究は、研究のための問いを「看護学実習に臨む学生のレディネスを把握した教員はどのような教授活動を行っているのか」とし、問いに対する回答文を「看護学実習に臨む学生のレディネスを把握した教員は、(1記録単位)という教授活動を行っている。」とした。

1) 記録単位および分析単位の決定

教員の記述全体を1文脈単位、問いに対する回答を含む内容の記述を1記録単位とした。

2) カテゴリ化

「研究のための問い」に照らし合わせながら、個々の記録単位を意味内容の類似性に基づき1カテゴリに集約し、その記述を忠実に反映したカテゴリとして命名した。この分析を反復し分析結果を洗練した。最後に、カテゴリに包含された記録単位数と比率を算出した。

「教員の特性」を問う質問への回答は、表計算ソフト「Microsoft Office Excel 365」を用いて記述統計値を算出した。

5. カテゴリの信頼性の確認

分析の信頼性・客観性は、本研究で用いた研究方法に精通している看護教育学研究者に全ての分析過程を提示し、スーパービジョンを受け、確認した。カテゴリの信頼性は、看護教育学研究者2名によるカテゴリへの分類の一致率を Sott, W. A の式(舟島, 2010b)に基づき算出し、検討した。なお、信頼性確保の判断基準は70%以上とした。

6. 倫理的配慮

対象者の不利益排除に配慮するとともに、自己決定の権利保障、プライバシー厳守を遵守した。また、研究の目的、方法、参加に伴う利益、不利益について掲示した上で、無記名個別投函による質問紙の回収を行い、対象者の匿名性と秘密保持による権利を保障し、対象者を公平に扱うよう配慮した。なお、本研究は、群馬県立県民健康科学大学倫理審査委員会による承認(健康科大第2016-47号)を得て実施した。

V. 研究結果

140名の対象者から回答があった(回収率35.1%)。このうち、自由回答式質問に回答のあった134名分の回答を有効回答とし分析対象とした。

1. 対象者の特性

対象が所属する教育機関の種類は、大学24名(17.9%)、短期大学25名(18.6%)、看護専門学校81名(60.4%)、看護専門学校《定時制》4名(2.9%)、担当した実習領域は、基礎看護学77名、成人看護学56名、老年看護学52名、母性看護学18名、小児看護学23名、精神看護学25名、在宅看護論28名(重複回答)。さらに、所属する教育機関の所在地、職位等、対象者の特性は多様であった。

2. 看護学実習に臨む学生のレディネス把握に向けた教授活動

分析対象134名の記述は、134文脈単位、993記録単位に分割された。このうち具体的な行動が不明な664記録単位は除外し、看護学実習に臨む学

生のレディネス把握に向けた教授活動の内容を具体的に記述した329記録単位を分析対象とした。分析の結果、看護学実習に臨む学生のレディネス把握に向けた教授活動を表す36カテゴリが形成された(表1)。

以下、36カテゴリのうち、記録単位数の多いものから順に結果を記述する。

【1. 実習に必要な知識・技術の充足度を把握するために、これまでの成績や事前学習の成果を確認する】は、「基礎看護技術の技術試験の成績から技術の修得情報を確認する」等の記述から形成された。

【2. 学生の知識の修得度を把握するために、学生に質問しその回答の正しさを確かめる】は、「病態や治療に関して、学生に確認し学生の口から言ってもらおう」等の記述から形成された。

【3. 看護技術の修得度を把握するために、学生の事前の技術練習を観察する】は、「実習初日の学内日に清拭の看護技術の練習を行い技術の確認をする」等の記述から形成された。

【4. 学生の身体的な状態を把握するために、体調や日常生活に関する情報を収集する】は、「健康な状態で実習を行うために、実習前・中を通して毎朝学生の症状の有無の報告を受ける」等の記述から形成された。

【5. 学習方法や態度を把握するために、提出物や学生の発言から事前学習の成果をみる】は、「事前学習課題が提出されたとき学習をどのようにしているかを聞き、書くことを目的としていないかを聞く」等の記述から形成された。

【6. 実習に向かう態度や精神的な状態を把握するために、実習オリエンテーション時の学生の様子を観察する】は、「実習開始前に学内で行うグループ別オリエンテーション時に、説明を聞くときの態度を注意深く観察する」等の記述から形成された。

【7. 実習に集中できる環境が整っているか否かを把握するために、家族の支援や課外時間の過ごし方を調べるとともに、学生に尋ねる】は、「実習中の家族援助の有無を直接学生から確認する」等

の記述から形成された。

【8. 学生の対人関係能力の修得度を把握するために、患者や教員と接するときの学生の行動を観察する】は、「実習中は、学生と患者との関わりを確認し、態度を判断する」等の記述から形成された。

【9. 担当する学生との関わりが深い教員に、問題のある学生に関する情報提供を依頼する】は、「看護過程の展開を学ぶ科目で学習が滞っていた学生の学習方法の情報をその科目の担当教員から聞く」等の記述から形成された。

【10. 事前に面談機会を設け、学生の精神的・身体的状態を尋ねる】は、「実習に対する不安感を面接を通じ把握する」等の記述から形成された。

【11. 学生の経験した看護実践を把握するために、これまでの実習経験を記した記録物に目を通す】は、「学生個々の受け持ち患者リストから学生のこれまでに体験した看護を知る」等の記述から形成された。

【12. 学生の個性を把握するために、学生の特性を記した記録を読むとともに学生に尋ねる】は、「個々の学生の傾向を把握するためにチューターの教員の面談記録を見る」等の記述から形成された。

【13. 学生の既習内容を把握するために、これまでの授業内容を記した資料を調べる】は、「実習開始時点の既習科目についてシラバスから把握する」等の記述から形成された。

【14. 自己評価能力を把握するために、学生の記述した学習目標を一読するとともに、達成に向けた計画と目標達成度に対する自覚を問う】は、「学生自身の実習目標をノートに書かせどのように目標に到達させていくのかを質問する」等の記述から形成された。

【15. 実習に対する精神的な状態を把握するために、記述を求めるとともに、発表機会を設ける】は、「実習開始前に行うグループ別オリエンテーション時に実習で何を学びたいかを自由に発表したときの学生の発言をみる」等の記述から形成された。

【16. 担当する学生との関わりが深い教員に、こ

れまでの学習態度や実習中の健康状態を尋ねる】は、「実習前の演習の態度を担当教員に確認する」等の記述から形成された。

【17. 学生の知識・技術の修得度を把握するために、実習中、学生とともに行動し、その言動に注目する】は、「看護技術は学生と共に実施場面に入り確認する」等の記述から形成された。

【18. 教員間の会議中の報告内容から、担当する学生の身体的・精神的・社会的状態を聞き取る】は、「教員間の会議で学生状況を報告する場から社会的な準備状態を把握する」等の記述から形成された。

【19. 学生の実習に向かう態度を把握するために、実習に取り組む学生の様子を観察する】は、「学生の実習場면을観察し態度のレディネスを把握する」等の記述から形成された。

【20. 教員間の会議や学生と直接接する機会を活用し、学生の学習態度に関する情報を普段から収集する】は、「教員間の会議の学生の状況報告から学生がどのように学んでいるのか知る」等の記述から形成された。

【21. 学生の表現力を把握するために、学習の成果物に目を通すとともに発言を聞く】は、「事前学習をみて文章作成能力の把握をする」等の記述から形成された。

【22. 学生間の協力体制を把握するために、実習グループメンバー間の相互行為を観察する】は、「実習開始前に学内で行うグループ別オリエンテーション時に、学生間の協力の様子を注意深く観察する」等の記述から形成された。

【23. 学生の看護過程の修得度を把握するために、看護過程演習の成果に目を通す】は、「学内の事例展開したファイルを持参してもらい情報収集の状況を確認する」等の記述から形成された。

【24. 学生の知識の修得度を把握するために、学生と会話しながら修得度を表す情報をとらえる】は、「実習直前に行う学内演習で担当グループの学生が沐浴について知識があるのか学生との会話から知識の程度の情報を得る」等の記述から形成された。

【25. 学生との相互行為を通し、実習に対する思いを表す情報をとらえる】は、「実習前に学生との直接対話を通して思いを確認する」等の記述から形成された。

【26. 実習中の知識の修得度や意欲を把握するために、実習記録を日々点検する】は、「実習中は、実習に臨む知識を把握するために日々の実習記録を確認する」等の記述から形成された。

【27. 学生の心身の状態を把握するために、学生の特性を記した記録を読む】は、「身体面は学生が記入した健康状態を参考にする」等の記述から形成された。

【28. 実習に対する興味・関心を把握するために、実習前の学内演習に参加するとともに、これまでの授業への取り組み姿勢を想起する】は、「実習への興味関心を知るために実習前に行う学内演習に立ち会う」等の記述から形成された。

【29. 学生の過度な緊張の有無を把握するために、質問に回答する学生の表情や口調を観察する】は、「緊張しすぎてないか学生に質問し表情を確認する」等の記述から形成された。

【30. 学生に、前回の実習中に明らかになった学習課題を尋ねる】は、「実習前アンケートで前回までの課題を把握する」等の記述から形成された。

【31. 1日の実習開始前後に実習指導者と学生の理解に関する情報交換を行う】は、「学生担当の実習施設指導者に朝1番に気になる学生の理解の程度について話すようにして情報交換する」等の記述から形成された。

【32. 担当する学生との関わりが深い教員に、学生の問題解決能力や責任感の程度を尋ねる】は、「問題解決の対処状況を担任の教員から情報収集する」等の記述から形成された。

【33. 学生の器用さを把握するために、看護技術演習時の学生の行動を観察する】は、「演習応接時に演習の器用さをみる」の記述から形成された。

【34. 患者の個別性考慮の程度を把握するために、患者を想定した技術練習を促し、その様子を観察する】は、「学内に戻ってから患者の状況を再現し看護技術のポイントを確認する」の記述から

形成された。

【35. 学生の実習に向かう態度を把握するために、実習期間中に面接を行う】は、「実習中に面接をし実習に臨む姿勢を判断する」の記述から形成された。

【36. 学生の実習進行を妨げるような悩みを把握するために、個別面談を行う】は、「3年生であれば実習グループ内での悩みを個別で確認する」の記述から形成された。

3. カテゴリの信頼性

看護教育学研究者2名によるカテゴリへの分類への一致率は、共に87.3%であり、36カテゴリは信頼性を確保していることを示した。

表1 「看護学実習に臨む学生のレディネス把握に向けた教授活動」を表すカテゴリと記録単位数

カテゴリ名	記録単位数(%)
1 実習に必要な知識・技術の充足度を把握するために、これまでの成績や事前学習の成果を確認する	34 (10.3%)
2 学生の知識の修得度を把握するために、学生に質問しその回答の正しさを確かめる	21 (6.2%)
3 看護技術の修得度を把握するために、学生の事前の技術練習を観察する	20 (6.1%)
4 学生の身体的な状態を把握するために、体調や日常生活に関する情報を収集する	18 (5.3%)
5 学習方法や態度を把握するために、提出物や学生の発言から事前学習の成果をみる	16 (4.7%)
6 実習に向かう態度や精神的な状態を把握するために、実習オリエンテーション時の学生の様子を観察する	15 (4.4%)
7 実習に集中できる環境が整っているか否かを把握するために、家族の支援や課外時間の過ごし方を調べるとともに、学生に尋ねる	14 (4.1%)
8 学生の対人関係能力の修得度を把握するために、患者や教員と接するときの学生の行動を観察する	14 (4.1%)
9 担当する学生との関わりが深い教員に、問題のある学生に関する情報提供を依頼する	14 (4.1%)
10 事前に面接機会を設け、学生の精神的・身体的状態を尋ねる	13 (3.8%)
11 学生の経験した看護実践を把握するために、これまでの実習経験を記した記録物に目を通す	13 (3.8%)
12 学生の個性を把握するために、学生の特性を記した記録物を読むとともに学生に尋ねる	12 (3.5%)
13 学生の実習内容を把握するために、これまでの授業内容を記した資料を調べる	11 (3.2%)
14 自己評価能力を把握するために、学生の記述した学習目標を一読するとともに、達成に向けた計画と目標達成度に対する自覚を問う	11 (3.2%)
15 実習に対する精神的な状態を把握するために、記述を求めるとともに、発表機会を設ける	10 (3.0%)
16 担当する学生との関わりが深い教員に、これまでの学習態度や実習中の健康状態を尋ねる	9 (2.7%)
17 学生の知識・技術の修得度を把握するために、実習中、学生とともに行動し、その言動に注目する	8 (2.4%)
18 教員間の会議中の報告内容から、担当する学生の身体的・精神的・社会的状態を聞き取る	8 (2.4%)
19 学生の実習に向かう態度を把握するために、実習に取り組む学生の様子を観察する	7 (2.1%)
20 教員間の会議や学生と直接接する機会を活用し、学生の学習態度に関する情報を普段から収集する	7 (2.1%)
21 学生の表現力を把握するために、学習の成果物に目を通すとともに発言を聞く	6 (1.8%)
22 学生間の協力体制を把握するために、実習グループメンバー間の相互行為を観察する	6 (1.8%)
23 学生の看護過程の修得度を把握するために、看護過程演習の成果に目を通す	6 (1.8%)
24 学生の知識の修得度を把握するために、学生と会話しながら修得度を表す情報をとらえる	5 (1.5%)
25 学生との相互行為を通し、実習に対する思いを表す情報をとらえる	5 (1.5%)
26 実習中の知識の修得度や意欲を把握するために、実習記録を日々点検する	5 (1.5%)
27 学生の心身の状態を把握するために、学生の特性を記した記録物を読む	4 (1.2%)
28 実習に対する興味・関心を把握するために、実習前の学内演習に参加するとともに、これまでの授業への取り組み姿勢を想起する	3 (0.9%)
29 学生の過度な緊張の有無を把握するために、質問に回答する学生の表情や口調を観察する	3 (0.9%)
30 学生に前回の実習中に明らかになった学習課題を尋ねる	3 (0.9%)
31 1日の実習開始前後に実習指導者と学生の理解に関する情報交換を行う	2 (0.6%)
32 担当する学生との関わりが深い教員に、学生の問題解決能力や責任感の程度を尋ねる	2 (0.6%)
33 学生の器用さを把握するために、看護技術演習時の学生の行動を観察する	1 (0.3%)
34 患者の個別性考慮の程度を把握するために、患者を想定した技術練習を促し、その様子を観察する	1 (0.3%)
35 学生の実習に向かう態度を把握するために、実習期間中に面接を行う	1 (0.3%)
36 学生の実習進行を妨げるような悩みを把握するために、個別面談を行う	1 (0.3%)
記録単位数総数	329 (100%)

VI. 考察

1. 本研究のデータの適切性

本研究の分析対象となった教員の年齢、教員経験年数、所属する教育機関の種類、所在地、職位、教員経験年数等、特性は多様であった。これは、

多様な特性を持つ教員の回答を反映して導かれた結果が、看護学実習に臨む学生のレディネス把握に向けた教授活動を網羅的に解明できていることを示す。

2. 実習に臨む学生のレディネス把握に向けた教授活動の特徴

本研究の結果は、実習に臨む学生のレディネス把握に向け実際に行っている教授活動 36 カテゴリ、すなわち 36 種類を明らかにした。この 36 カテゴリ各々と関連文献との照合に基づき、より抽象度の高い包括的な概念への統合、置換を行ない、本研究が明らかにした教授活動の特徴を考察した。なお、考察は特徴ごとに示す。

1) 記録物や学生行動を観察し、目標達成に活用できる資源を把握しようとする

【13. 学生の既習内容を把握するために、これまでの授業内容を記した資料を調べる】【1. 実習に必要な知識・技術の充足度を把握するために、これまでの成績や事前学習の成果を確認する】【17. 学生の知識・技術の修得度を把握するために、実習中、学生とともに行動し、その言動に注目する】【2. 学生の知識の修得度を把握するために、学生に質問しその回答の正しさを確かめる】【26. 実習中の知識の修得度や意欲を把握するために実習記録を日々点検する】【22. 学生間の協力体制を把握するために、実習グループメンバー間の相互行為を観察する】【11. 学生の経験した看護実践を把握するために、これまでの実習経験を記した記録物に目を通す】である。このうち、【13】【1】【17】【2】【26】は、提供された授業内容を学生がどの程度修得しているのか、すなわち「既習内容」の修得度を把握しようとする教授活動であることを示す。次に【22】は、他学生の協力という「他者からの支援」を学生が得られるかどうかを把握しようとする教授活動であることを示す。最後に、【11】は、これまでの実習経験を記した記録物に目を通し、学生の「過去の実習経験」を把握しようとする教授活動であることを示す。これらは、【13】【1】【17】【2】【26】【22】【11】が、記録物や学生の行動を観

察しその学生の「既習内容」、「過去の実習経験」、「他者からの支援」の把握を意図した教授活動であることを意味する。「既習内容」、「過去の実習経験」、「他者からの支援」とは、看護学実習中の学生が実習目標達成に向けて活用できる学習資源である(舟島、2013b)。

2) 実習目標を達成するために学生が示す行動とその行動に影響する要因を把握しようとする

【26. 実習中の知識の修得度や意欲を把握するために、実習記録を日々点検する】【5. 学習方法や態度を把握するために、提出物や学生の発言から事前学習の成果をみる】【19. 学生の実習に向かう態度を把握するために、実習に取り組む学生の様子を観察する】【35. 学生の実習に向かう態度を把握するために、実習期間中に面接を行う】【12. 学生の個性を把握するために、学生の特性を記した記録を読むとともに学生に尋ねる】である。これら5カテゴリは、実習目標を達成するために、学生が示す行動とその行動に影響する要因を把握しようとするという特徴を持つ。【26】の意欲とは、実習目標を達成しようとする意欲すなわち学習意欲であった。学習意欲とは、積極的・能動的に学習しようとする態度を表す(東・芝・梅本・梶田、1988)。態度とは、人の社会的行動の決定に対して大きな影響を及ぼす心的要因であり(中島・子安・繁樹・箱田・安藤、2005)、「実習に向かう態度」は、学生の行動への影響要因となる。また、【12】の個性とは、学生の性格であった。学生の性格は、行動に影響する(影本、2010)。これは、「学生の個性」が、学生の行動への影響要因となることを示す。

3) 看護学実習中に学生にかかる精神的・身体的負担を見越し、実習前の学生の心身の状態に関する情報を収集する

【10. 事前に面談機会を設け、学生の精神的・身体的状態を尋ねる】【15. 実習に対する精神的な状態を把握するために、記述を求めるとともに、発表機会を設ける】【27. 学生の心身の状態を把握するために、学生の特性を記した記録を読む】【4. 学生の身体的な状態を把握するために、体調や日常生活に関する情報を収集する】である。これら4

カテゴリは、教員が学生に直接的・間接的に働きかけ、看護学実習に臨む学生の精神的・身体的な状態を把握しようとするという共通性を持つ。看護学実習に取り組んでいる学生は、「否定的経験累積による将来への不安の高まり」、など精神的負担となり得る問題、「強度のストレスと疲労による身体症状出現」など身体的負担となり得る問題など37種類もの問題に直面している(山下・中山、2015)。これは、看護学実習が学生にとって精神的・身体的に大きな負担のかかる授業であることを示す。教員は、実習中にかかるこの精神的・身体的負担の大きさを熟知している。そのため、教員は、その負担に学生が耐えうるかどうかを知るために【10】【15】【27】【4】という教授活動を展開している可能性が高い。

4) 学生の言動に注目し、学習の阻害要因の有無を把握しようとする

【36. 学生の実習進行を妨げるような悩みを把握するために、個別面談を行う】【29. 学生の過度な緊張の有無を把握するために、質問に回答する学生の表情や口調を観察する】【7. 実習に集中できる環境が整っているか否かを把握するために、家族の支援や課外時間の過ごし方を調べるとともに、学生に尋ねる】である。これら3カテゴリは、学生の言動に注目し、学習の阻害要因の有無を把握しようとしているという共通性を持つ。このうち【36】は、個別面談中の学生の言動に注目し、悩みという学習の阻害要因の有無を把握しようとしている教授活動である。次に【29】は、質問に回答する学生の言動に注目し、過度な緊張という学習の阻害要因の有無を把握しようとしている教授活動である。先行研究(沖田・影本・大屋・池原・中西、2015; 月田・清水・酒井明・繁田・酒井影、2016)は、実習中の教員が、学生本来の力を発揮できるよう、学生の緊張を緩和するように関わり、これによって学生が、目標達成に臨めたと感じるようになることを明らかにした。また、悩みや不満を言っても嫌な顔をしないで聞いてくれる、元気がないとすぐに気づいて励ましてくれるなどの【7】の「家族の支援」は「学習意欲」に関係(櫻井・中

原・岸田・佐藤、2016)し、「学習意欲」は、学習活動に影響する。これは、実習中の学生が受ける「家族の支援」の無さが、学習の阻害要因となり得ることを示す。さらに、【7】の「課外時間の過ごし方」とは、具体的には、一人暮らしや遠方からの通学などに時間を費やす必要があるかどうかであり、学生が課外時間に必要な知識の補完や記録の作成などにかかる時間を確保しにくい状況にあることを示す。これは、「課外時間の過ごし方」が、学習の阻害要因となり得ることを示している。

5) 学生の行動を観察し、看護基礎教育機関の卒業時に到達すべき目標を基準とし学生のレディネスを把握しようとする

【23. 学生の看護過程の修得度を把握するために、看護過程演習の成果に目を通す】【3. 看護技術の修得度を把握するために、学生の事前の技術練習を観察する】【33. 学生の器用さを把握するために、看護技術演習時の学生の行動を観察する】【34. 患者の個別性考慮の程度を把握するために、患者を想定した技術練習を促し、その様子を観察する】【8. 学生の対人関係能力の修得度を把握するために、患者や教員と接するときの学生の行動を観察する】である。厚生労働省(2011)は、看護基礎教育課程卒業時に到達が求められる5つの目標を提示した。それは、「①根拠に基づき看護を計画的に実践する能力」「②健康の保持増進、疾病の予防、健康の回復にかかわる実践能力」「③ヒューマンケアの基本的な能力」等である。このうち「①根拠に基づき看護を計画的に実践する能力」は、アセスメント、計画実施、評価といったまさに看護過程を構成する一連の流れの修得をめざす目標の基準である。【23】は、教員が、学生の看護過程の修得度を把握するために、看護過程演習の成果に目を通すという教授活動である。これは、【23】が、学生の記録物を観察し、看護基礎教育機関の卒業時に到達すべき「①根拠に基づき看護を計画的に実践する能力」を基準として学生の看護過程の修得度を把握しようとする教授活動であることを示す。次に、「②健康の保持増進、疾病の予防、健康の回復にかかわる実践能力」は、看護技術の修得をめざ

す目標の基準である。【3】【33】【34】は、学生が患者に看護技術を提供できる程度を把握するために技術練習時の学生の行動を観察するという教授活動である。これらは【3】【33】【34】が、学生の行動を観察し看護基礎教育機関の卒業時に到達すべき「②健康の保持増進、疾病の予防、健康の回復にかかわる実践能力」を基準として学生の技術の修得度を把握しようとする教授活動であることを示す。残る、「③ヒューマンケアの基本的な能力」は、対人関係能力の修得をめざす目標の基準である。これは、【8】が、学生の行動を観察し、看護基礎教育機関の卒業時に到達すべき「③ヒューマンケアの基本的な能力」を基準として学生の対人関係能力の修得度を把握しようとする教授活動であることを示す。

以上は、これら5カテゴリが学生の行動を観察し、看護基礎教育機関の卒業時に到達すべき目標を基準とし学生のレディネスを把握しようとすることを示す。

6) 学生の発言を聞き、自己評価の適確さを確認しようとする

【14. 自己評価能力を把握するために、学生の記述した学習目標を一読するとともに、達成に向けた計画と目標達成度に対する自覚を問う】【30. 学生に、前回の実習中に明らかになった学習課題を尋ねる】である。これら2カテゴリは、学生の発言を聞き自己評価の的確さを確認するという共通性を持つ。このうち【14】の自己評価とは、自分で自分の学業、行動、性格、態度などを査定し、それによって得た知見によって自分を確認し、自分の今後の学習や行動を改善・調整するという一連の行動である(細谷・奥田・河野・今野、1990b)。これは、学生の適切な自己評価が、その学生の実習目標を達成するための学習や行動の改善・調整に結びつくことを意味する。残る【30】の「前回の実習中に明らかになった学習課題」とは、入学から卒業までに行われる看護学実習を1つの授業としてみた時には、授業の進行中に行われる評価、すなわち形成的評価の結果である。学生は、この形成的評価の結果に基づき、次の実習中に目標達成

できるよう、学習の方向性を見いだそうとする(藤吉、2015)。次の実習中に目標達成できるよう、学習の方向性を見いだす活動は、まさに、学生による自己評価の活動である。

7) 学生のレディネスを表す情報が出現したときには、いつでも機会を逃さず情報を収集しておく

【24. 学生の知識の修得度を把握するために、学生と会話しながら修得度を表す情報をとらえる】

【25. 学生との相互行為を通し、実習に対する思いを表す情報をとらえる】

【20. 教員間の会議や学生と直接接する機会を活用し、学生の学習態度に関する情報を普段から収集する】

【18. 教員間の会議中の報告内容から、担当する学生の身体的・精神的・社会的状態を聞き取る】

【6. 実習に向かう態度や精神的な状態を把握するために、実習オリエンテーション時の学生の様子を観察する】

【28. 実習に対する興味・関心を把握するために、実習前の学内演習に参加するとともに、これまでの授業への取り組み姿勢を想起する】

である。これら6カテゴリは、教員が、学生のレディネスを表す情報が出現したときには、いつでも機会を逃さず、情報を収集しておくという共通性を持つ。いつでもとは、学生との会話や相互行為、会議、レディネスの把握を目的に含まない活動である実習オリエンテーション時や演習中などであった。【24】の会話や【25】の学生との相互行為を展開しているときに、知識の修得度を表す情報や実習に対する思いを学生が必ずしも表すとは限らない。次に【20】

【18】の教員会議とは、学校運営上の重要事項について教職員が協議ないし審議す会議である(青木ら、1988)。教員が担当する学生の情報は、その会議中、必ずしも、話し合われるとは限らない。にもかかわらず教員は、【24】【25】【20】【18】という教授活動を展開している。これは、教員がいつでも機会を逃さず、情報を収集していることを示す。また、【6】の実習オリエンテーションの主たる目的は、学生への必要情報の提供、留意事項の周知徹底である。【28】の演習とは、学内に実践の場を想定し、それを活用してクライアントの直接的な看護に必要な技術修得をめざす授業である

(舟島、2013c)。その主たる目的は、当然、その演習の目標達成にある。これらは【6】【28】が、【24】【25】【20】【18】と同様にいつでも機会を逃さず、情報を収集していることを示す。

8) その情報を保有している可能性の高い他者に対して、自身一人では把握しきれない情報の提供を求める

【31. 1日の実習開始前後に実習指導者と学生の理解に関する情報交換を行う】

【16. 担当する学生との関わりが深い教員に、これまでの学習態度や実習中の健康状態を尋ねる】

【32. 担当する学生との関わりが深い教員に、学生の問題解決能力や責任感の程度を尋ねる】

【9. 担当する学生との関わりが深い教員に、問題のある学生に関する情報提供を依頼する】

である。これら4カテゴリは、教員が他者に対して自身で把握できなかった情報の提供を求めているという共通性を持つ。先行研究は、教員が直接把握できなかった情報を実習指導者から得ることが、目標達成に向けた効率的な実習指導に繋がったことを明らかにした(中村ら、2014)。

【31】は、まさに、教員が、自身では把握しきれない情報の提供を求めている教授活動である。【16】

【32】【9】の学生との関わりが深い教員とは、「担任の教員」、「その学生の過去の実習担当教員」であった。担任とは、学生の個人的な問題の相談に乗る、健康状態に配慮するという役割を担う教員であり(関・吉山・三隅・吉田、1997)、「担任の教員」は、当然、学生の個人的な情報を保有している。また、看護師等養成所の運営に関する指導ガイドラインは、看護師養成所が専門領域ごとに専任教員を配置するよう規定している(勝又・門脇・清水、2017)。これは、看護学実習の領域が変わるごとに、学生の実習担当教員もかわることを意味する。「その学生の過去の実習担当教員」は、当然、過去の実習時の学生に関する情報を保有している。一方、これからその学生を担当する教員は、学生の個人的な情報や過去の実習中の学生の情報を直接観察できる状況にはない。そこで教員は、レディネス把握に必要なものの把握しきれない情報を収集するために【16】【32】【9】という教授活動を

展開する。

9) 学生が、自身の知識や技術の修得度を正確に表現できるか否かを把握している

【21. 学生の表現力を把握するために、学習の成果物に目を通すとともに発言を聞く】である。教員は、学生が書いた内容を手掛かりに学生の知識や技術の修得度を査定し、それに基づき教授活動を展開する。学生は、その教授活動によって目標達成に向けた新たな行動を示す。その反面、看護学実習中、「適切な文章表現困難による実習記録記載難航」という問題に直面している学生も少なからず存在する(山下・中山, 2015)。その場合、教員は、学生の話しや書いたりした内容からは、その知識や技術の修得度の正確な把握が困難になる。自身の知識や技術の修得度を正確に表現できない学生を目標達成に向けて支援することは難しく、そのことを事前に把握するために教員は、【21】という教授活動を行い、学生が能率的に目標達成に向かえるように支援している。

Ⅶ. 結論

1. 3年課程の教員による回答は、看護学実習に臨む学生のレディネス把握に向けた教授活動を示す36カテゴリを形成した。
2. 上記の教授活動36カテゴリは、9側面からなる特徴を持つことを示した。

Ⅷ. 研究の限界と今後の課題

本研究は、標本調査を適用した。このため、今回データを得ることができなかった対象者からさらなるデータ収集を行った場合、新たなカテゴリ形成につながる可能性がある。この確認は、今後の課題である。

本研究における利益相反は存在しない。

文献

青木一・小川利夫・齋藤浩志・山住正己・大槻健・柿沼肇(1988). 現代教育学事典(pp. 434-435). 東京: 労働旬報社.
Areewan, K., Nongkran, V., & Acharaporn, S. (2010).

Readiness for self-directed learning among nursing students in Thailand. *Nursing and Health Sciences*, 12, 177-181.

藤田三恵・吉川峰子・蔵屋美紀(2015). 看護学生の臨地実習における学習活動自己評価の実態と教授活動. *日本看護医療学誌*, 17(1), 12-20.

舟島なをみ(2016). 看護教育学第6版 (p. 261). 東京: 医学書院.

舟島なをみ(2010a). 看護教育学研究—発見・創造・証明の過程第2版 (pp. 227-261). 東京: 医学書院.

舟島なをみ(2010b). 看護教育学研究—発見・創造・証明の過程第2版 (pp. 245-247). 東京: 医学書院.

舟島なをみ(監)(2013a). 看護教育学における授業展開—質の高い講義・演習・実習の実現に向けて (p. 22). 東京: 医学書院.

舟島なをみ(監)(2013b). 看護教育学における授業展開—質の高い講義・演習・実習の実現に向けて (p. 179). 東京: 医学書院.

舟島なをみ(監)(2013c). 看護教育学における授業展開—質の高い講義・演習・実習の実現に向けて (p. 173). 東京: 医学書院.

東洋・芝祐順・梅本堯夫・梶田叡一(編)(1988). 現代教育評価事典 (p. 66). 東京: 金子書房.

細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜(編)(1990a). 新教育学大事典2 (pp. 257-329). 東京: 第一法規出版.

細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜(編)(1990b). 新教育学大事典3 (pp. 406-407). 東京: 第一法規版.

一條明美・神成陽子・升田由美子(2012). 看護技術学習のレディネス形成を目指した技術評価演習での学生の学び—1年次の状況設定課題終了後のレポート分析—. 旭川医科大学研究フォーラム, 13, 11-18.

影本妙子(2010). 看護学生による臨地実習指導の評価—学生の特性に焦点を当てて—. 川崎医療短期大学紀要, 30, 17-22.

- 鎌田由美子・松田安弘・山下暢子(2013). 教員による2年課程看護専門学校学生のレディネスの把握に関する研究—看護学実習における教授活動に焦点を当てて—. 群馬パース大学紀要, 15(3), 9-20.
- 勝又浜子・門脇豊子・清水喜与子(2017). 看護法令要覧平成29年度版(pp. 108-156「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン」の項). 東京:日本看護協会出版会.
- 厚生労働省(2011). 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書(2018.2.28取得, <http://www.mhlw.go.jp/sft/houdou/2r985200001310q-att/2r9852000001314m.pdf>.)
- 松浦和代(2001). 日本語版SDLRSの開発と看護教育への応用. 阿部紀子(編)第2章日本語SDLRSの作成. 11年・12年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書, 7-11.
- 中島義明・子安増生・繁樹算男・箱田祐司・安藤清志(2005). 心理学辞典(p. 552). 東京:有斐閣.
- 中村伸枝・竹中沙織・仲井あや・上林多佳子・若菜幸子・和住淑子・(…）・河部房(2014). 学生の看護実習を通じた学びの特徴と大学教員と臨床指導者の連携・協働のあり方. 千葉大学院看護学研究科紀要, (36), 21-26.
- 沖田聖枝・影本妙子・大屋まり子・池原麗子・中西啓子(2015). 看護学生による実習指導評価の変化に影響する要因. 川崎医療短期大学紀要, (35), 9-15.
- 櫻井美奈・中原るり子・岸田素子・佐藤京子(2016). 新設A看護大学系学生の領域別実習における心理社会的状況の検討. 共立女子大学看護学雑誌, (3), 38-48.
- 関文恭・吉山尚裕, 三隅二不二, 吉田道雄(1997). 看護専門学校におけるクラス担当教員のリーダーシップ行動測定尺度の作成とその妥当性. 九州大学医療技術短期大学部紀要, (24), 25-32.
- 徳本弘子・後藤桂子・新井麻紀子(2015). 実習指導事例から見た新人教員の実習指導の特徴. 埼玉県立大学紀要, (17), 23-30.
- 月田佳寿美・清水誉子・酒井明子・繁田里美・酒井彰久(2016). 臨地実習で看護教員が学生に対して行うケアリング. 福井大学医学部研究雑誌, 16(1), 21-35.
- 山下暢子・中山登志子(2015). 看護学実習中の学生が直面する問題の解明. 看護教育学研究, 24(2), 8-9.

Abstract

The purpose of this study was to reveal teaching activities of faculty members to grasp readiness of the third-year nursing students in their practical training and discuss characteristics of these activities. Questionnaire forms which contain open-ended questions on teaching activities to grasp readiness of the students were distributed to 399 faculty members in basic nursing-study courses in the entire country. The responses were obtained individually and anonymously through mailing services and were analyzed using content analysis in nursing studies referring to the methodology proposed by Berelson, B. Responses were obtained from 140 faculty members (response rate 35.1%), and of these 134 valid responses were analyzed. As a result, 36 categories describing teaching activities to grasp readiness of nursing students in their practical training were established; these included “to investigate materials which contain descriptions on lectures in order to grasp what students have learned so far” and “to ask students about study subjects which have been revealed during the previous training”, etc. The level of agreement in classification categories using the equation of Scott, W.A. was over 70%, suggesting reliability of each category. In discussion, 9 characteristics were suggested as teaching activities to grasp readiness of the students.